奇妙なアメリカ人とその幸福な死

大　井　映　史

アメリカ人の無垢，あるいは無知とその体験が，"The Short Happy Life of Francis Macomber" のモティーフであることは確かだ。イギリス人狩猟家，ウィルソン（Wilson）の思いを通して，いかにマコーマー夫妻が典型的なアメリカ人であるかは，繰り返し主張される。彼は常に，この夫妻がアメリカ人だということを意識するのである。特に夫のフランシス（Francis）は，アフリカという舞台でその小児性をさらけ出す，"The great American boy-men"（p. 150）[1] の代表として描かれる。そして，この作品に劇的な展開を授けるのは，この夫の未熟さゆえの大失態と，その体験に対する彼のあまりにも単純な反応である。この作品は，あの国籍喪失者の醒めた目を持つアメリカ人を主役に据えていないという点で，ヘミングウェイの作品群の中にあっては珍しい作品だと言えるかも知れない。

本論では，フランシス・マコーマーとその妻であるマーゴット（Margot）の，男女の葛藤に焦点をあてて，ヘミングウェイ文学におけるアメリカ人の役割を考えてみたい。

1. An American Adam

夫のフランシスは見下げはてた男として登場する。彼の愚かさは，冒頭の昼食時の会話の中で，彼自らが露呈する。彼は妻のマーゴットが姿を消すと，ウィルソンにライオン狩りでの出来事について，自分が演じた失態を外部には漏らさないようにと，こっそりと頼むのだ。そして，そんなことを頼むことの愚をウィルソンにたしなめられると，彼はすぐに謝る。Philip Young のことばを借りれば，"spinelessly apologizes"[2] する。

> "I'm sorry," Macomber said and looked at him with his American face that would stay adolescent until it became middle-aged.... "I'm sorry I didn't realize that. There are lots of things I don't know." (p. 125)

フランシスは，中年になってもまだ青春をとどめている，要するに，中年になってなお子供のままである，という点で，たいへんアメリカ人らしいとされる。彼は素直なのかも知れないが，あまりにも未熟なのである。へりくだることによって，彼は一層ウィルソンに侮られる。一人前の男としての誇りや品位を保つ術を，フランシスが知っているとは思えない。

フランシスの失態とは，ライオン狩りで，彼が手負いのライオンを前にして兎のように逃げ出したことだ。しかし，ライオン狩りでの出来事は，冒頭の事件後を描く部分に続い

て，フランシス自身の回想から繙かれるまで，伏せられる。フランシスの落ち度を特徴づける上で重要なのは，ライオン狩りでの彼の行動よりも，この冒頭の昼食時に彼が取る態度だと言えよう。ライオン狩りから帰ったフランシスを，キャンプの人々はライオンを仕留めた勇者として迎え，肩や腕の上に載せて称えるのだけれど，これを彼は黙って受け入れる。そして，彼はウィルソンに，自分の恥を公言してくれるなと，こっそり頼むのである。ウィルソンやマーゴットのフランシスに対する評価を決定づけるのは，彼のこうした卑怯な態度なのである。

ライオンに脅えること自体は決して恥ずべきことではない。「勇者は必ず三度ライオンに脅える」ということわざがソマリにはあったと語られている。このことわざが，恐怖心を克服する時に勇者が生まれることを意味し，恐怖を知ることにおいて，臆病と勇気とが表裏一体の関係にあることを教えるものであることは明らかだ。フランシスがこのことわざを知らないことは，彼の恐怖に対する無知を示している。ライオン狩りに臨む朝，恐いんじゃないでしょうねと妻に問われたフランシスは，“‘Of course not....’”（p. 131）と応える。不安を抱きながらも彼は見栄をはって，夫として，男としての誇りを保とうと考えるのだ。彼は，彼を脅かす不安の正体を知ろうとはしないのである。自分が雇ったプロハンター，ウィルソンにあれこれとたしなめられながら，得体の知れぬ不安に憑かれたまま，自分自身をどう処すべきかも分からないまま，フランシスはライオン狩りに臨む。手負いのライオンに直面して初めて，彼は恐怖を認めるのだ。アフリカという辺境が，彼が恐れを知らぬ子供のままでいることを許さない。彼は臆病者になるのである。

恐怖感に負けて，手負いのライオンを放置して逃げようと考えたこと，そして，自制力を失い，何もかも分からなくなって，実際に脱兎のごとく銃をほうり出して逃げたこと，これも確かに，フランシスにとっては恥ずべきことであろう。しかし，彼が恥ずべきはそれだけではない。さらにこの後，語りが冒頭に置いている事件後の昼食時に，彼が何ごともなかったかのように振る舞い，己れの恥を隠そうと企てることこそ，もっと恥ずべきことである。フランシスが小児的本性をさらけ出し，臆病者の称号を拭いがたいものとするのは，むしろ事件後の彼の言動である。

昼食時，「何ごともなかったような」フランシスとウィルソンの会話に，マーゴットは敏感に反応する。彼女は，欺瞞に満ちた，わざとらしい二人のやり取りに驚き，憤るのだ。結婚して11年になる。しかしマーゴットは，自分の夫がだれの目にも明らかなあれほどの失態を演じながら，平然を装って“‘He is a good lion, isn't he?’”（p. 122）などと言える卑劣な男だとは知らなかったのである。マーゴットの，夫に対する失望と軽蔑とが決定的なものとなるのは，この時だ。ライオン狩りからの帰り，確かにマーゴットはウィルソンの口にくちづけることで夫の遁走を叱責しはするが，彼女がフランシスを見限るのはこの時である。この昼食の場面で初めて，マーゴットは男としてのウィルソンに目を向け，

彼の才能を悟っている。

マーゴットが愛想を尽かすのは，事件後の夫に対してである。後，マーゴットが夫に対して精神的な迫害を加えることは確かだけれど，だからといって彼女に「アメリカ的性悪女」[(3)]を見ることは，どうも性急に過ぎるという気がする。ライオンに乾杯しようとする二人を遮って，マーゴットがウィルソンの赤ら顔を話題にしようとする時，彼女はまだ夫の立場に立って発言している。彼女がウィルソンの顔が赤いと指摘することは，ウィルソンがたとえ穏やかな表情を見せていても，それは客の前だからであって，内心では彼はフランシスを馬鹿にしているのだという，夫への忠告だとは考えられないだろうか。少なくとも，平然を装うことでフランシスは一層自らの品位を落としめてしまうことになると，彼女は知っているのである。だから，夫の臆病心を露呈させたライオンを話題にして平然と乾杯までしようとする二人に，マーゴットははっきりとその欺瞞を告発し，自分の苛立ちを訴えるのである。しかし，フランシスの反応は鈍い。やがて，泣き出しそうになってこの場を去るマーゴットを，ウィルソンは "a hell of a fine woman" (p. 127) だと思う。"She seemed to understand, to realize, to be hurt for him and for herself and to know how things really stood." (p. 127) このウィルソンの思いが見当外れであるとは思えない。

事件後のフランシスは，あまりにも意気地がないのだ。「きょうはぼくも赤い顔をしている」と，愚かしいジョークを試みるフランシスが，彼女の言わんとするところを理解しているとは思えない。その結果，マーゴットは夫に代わって屈辱を味わうことになる。ライオン狩りでの出来事は，その張本人だけでなくその妻をも窮地に追い込んでいる。しかし，フランシスにはそのことが分かっていない。彼は臆病者を夫に持った妻の立場に思い至ろうとはしない。すでに起きてしまったことをあれこれと後悔しているだけだ。フランシスは，妻の怒りが鎮まるのを待とうとするだけである。女性について，彼は非常に多くのことを本で読んで知っている。しかし，本で読んだ以外には，彼には実際の女というものが，まるで分かってはいないのだと言えよう。

マーゴットを性悪女に仕立てあげるのは，フランシスの小児性である。20分ほどすると，なるほど，マーゴットは "the hardest, the cruelest, the most predatory" (p. 126) な女へと変貌して戻ってくる。「アメリカ的性悪女」の登場である。彼女はライオン狩りのことはもう忘れた，夫がうまくライオンを仕留められるかどうかは問題じゃない，ライオンを殺るのは夫じゃなくてウィルソンの仕事なんだから，と言うのである。この発言が，フランシスを庇うものであるようでいて，実は彼を子供扱いし，彼の無能を声高に表明するものであることは言うまでもない。彼女の変わり身の早さに驚かされるウィルソンは，マーゴットの再登場を "enamelled in that American female cruelty" (p. 127) と形容する。このようにマーゴットが装いを新たにしなければならないのは，夫であるフランシス

の責任である。"'I suppose that I rate that for the rest of my life.'" (p. 123) などとウィルソンに漏らすフランシスの女々しさが，彼女を苛立たせ，"bitch" へと変貌させるのだ。フランシスには，自分の妻さえ，あるべき所に置いて管理し，守る，という能力がないのである。彼が，"ithyphallic authority" などと言うものを持ち合わせていないことは，明らかである。(4)

マコーマー夫妻には "a sound basis of union" (p. 140) があったと語られる。もちろん皮肉である。"Margot was too beautiful for Macomber to divorce her and Macomber had too much money for Margot ever to leave him." (p. 140) 二人の結びつきはいかにも危ういものである。事実，マーゴットは離婚のチャンスを何度か逃している。一方，フランシスがマーゴットと別れないのは，彼が女性の扱いかたを知らないからでもある。彼にはより美しい新しい妻を迎える能力がない。だから，彼は離婚の危機に際して常に "a great tolerance" (p. 139) を示してきた。彼の辛抱強さは，"...seemed the nicest thing about him if it were not the most sinister" (p. 139) と語られている。フランシスが，マーゴットにしがみついて生きていることは明らかだ。ただし，フランシスは女性というものを知らない。彼はマーゴットに母親的存在であることを期待して彼女にしがみついているのである。マーゴットが満たされないのは当然であろう。

手負いのライオンを前にして逃げ出したこと以上に，フランシスは，妻に自分の失態を見られたことを残念に思っているようなことを言う。"'It's not very pleasant to have your wife see you do something like that.'" (p. 129) 女にいいところを見せるために狩りをするような男を，いつまでも済んでしまったことにこだわる男を，ウィルソンが軽蔑するのも当然である。フランシスが，"the contempt of tutor-father Wilson and of wicked-mother Margot" (5) に耐えなければならないのは，自業自得だと言える。ウィルソンが考えるように，フランシスがこれ程ふがいない "silly beggar" であるのは，"the poor sod's own bloody fault" (p. 144) だとしか言いようがない。フランシスに同情の余地はない。マーゴットに "wicked-mother" の役を，「アメリカ的性悪女」の役を押しつけているのは，フランシスの小児性である。だから，マーゴットは，ウィルソンと姦通することによって女性性を回復せざるをえない。彼女がそれを夫の目の前で行うことは，いわば，男として彼女の女性性を満たそうとはしないフランシスに対する，彼女の復讐であると言えよう。

マーゴットは *The Sun Also Rises* に登場するヒロイン，ブレット・アシュレイ (Brett Ashley) に似ている。二人が男性に待ち望むものは，男らしさの回復である。しかし，彼女たちの願いは適えられそうにない。マーゴットもブレットも，もはや夫には経済力以外のものを期待しようとはしない。そして，彼女たちは平然と無能な夫を裏切る。常識的に言えば，二人は共に道徳的に腐敗しているのかも知れないけれど，生きることに対して，

この二人の周辺をさまよう男たちよりもはるかに，彼女たちは情熱を持っている。ロバート・コーン（Robert Cohn）の恋人，フランシス（Frances Clyne）こそ，その陰険さという点でマーゴットの原型だとも言われる[6]。しかし，フランシスがコーンについて南米へ行こうとはしないのに対し，マーゴットはアフリカへ，暗黒大陸へと赴き，銃を取ることのできる女性だ。このことは，闘牛に際して馬が殺される情景を目の当たりにしても，ブレットが決して胸を悪くしたりはしないことに匹敵する，とは言えないだろうか。この闘牛の場面で怖じけづいているのは，ブレットに熱を上げているロバート・コーンである。ただブレットがイギリス人であることを除けば，年齢的にも，その美しさの点でも，その行動の大胆さについても，マーゴットとブレットには共通性があると言えるのではないか。

マーゴットとブレット以上に，フランシス・マコーマーとロバート・コーンとの間には，かなりの類似性が認められよう。高村勝治氏は，コーンについて次のように書いている。「彼は，ひそかに耐えるという美徳を知らない。自分の優越さをみせびらかすためにボクシングを習い，鼻をつぶす。ただ書物ばかりを読んで実人生を知らず，眼鏡をかけている。闘牛に興味をもてない。そして，自分の感情をおさえることができず，マイクやロメロとけんかし，相手をなぐりつけ，やがて，おいおいと声を出して泣き，あやまる。人間としての品位がない[7]。」コーンはいつもは内気でおとなしい男である。酒好きでもない。本当はボクシングなど嫌っている。闘牛も同様。コーンにとってボクサーや闘牛士の生き方は異常なものでしかない。闘牛場では気分を悪くし，マイク（Mike Campbell）に去勢牛にたとえられ，侮辱される。プリンストン出身のユダヤ人で，ジェイク（Jake）とはテニス友達である。離婚に際しては妻がかわいそうだと思ってためらっているうちに妻のほうから離婚される。彼を利用しようとしただけの女を愛していると思い込み，次にブレットにのぼせあがると，捨てられた後もつきまとう。コーンは，戦争体験を持たない，単純で素朴な，小児的 "non-Hemingway man" の代表である。

フランシスはマーゴットを取り戻すためにはるばるアフリカへとやって来ている。決して狩猟が目的ではない。フランシスにとってアフリカは，二人の愛を回復するロマンティック大陸なのである。そこで彼女の浮気を知ったフランシスは次のように訴える。"'There wasn't going to be any of that. You promised there wouldn't be.... You said if we made this trip that there would be none of that. You promised.'" (p. 140) アフリカへ行けばもう一度マーゴットとやり直せるのだとフランシスは信じていた。「どこへ行こうと同じことだ，自分自身からは逃れられない」という，ジェイクの忠告を理解しないコーンとまったく同じだった。マーゴットの浮気は，フランシスがアフリカに抱いた幻想を打ち砕くのである。

「アメリカのアダム」という概念は，この小児的フランシスを形容するのに打ってつけだと思われる。フランシスは，自分がすでに楽園を追われたことを，無垢はすでに喪失さ

れており，あがないを求めて新しい旅に出なければならないことを，つまり，りっぱな成人として生きなければならないことを，何よりもまず知るべきアメリカ人として描かれている。情況は，彼が子供のままでいることを許してはいない。彼のライオン狩り体験は，いわば，アメリカ文学の伝統における「アメリカ体験」の延長線上にあるものだと言うことができるのではないか。

2. The Reversion

物語の後半に描かれるフランシスの成長は，皮肉なことに，彼にとっては最悪の屈辱的体験となったライオン狩りが準備し，彼がアフリカに見た夢を打ち砕いたマーゴットの浮気がきっかけとなって起こるものである。ヘミングウェイの作品にあって，狩猟が，闘牛や戦争と並んで，人間を "violent death"[8] に直面させるイニシエイションの背景となることは言うまでもない。しかし，狩猟体験がそれだけでフランシスをイニシエイトするわけではない。その夜，彼はもう一度ライオン狩りでの出来事を思い返すことによって，急激な，精神的変容を遂げるのである。

その夜，フランシスはライオン狩りでの出来事をもう一度思い返すことによって，心に生じた "cold, hollow fear" (p. 129) を確認し，胸を悪くする。彼の不安は，前日の夜明け前，初めてライオンの遠吠えを耳にした時に始まり，早朝の薄明の中，ライオンがその堂々たる姿を現した時に，膨らんでいったものだ。ライオンに向かい合ったフランシスが知る恐怖は，狩猟が，妻にいいところを見せるための単なるスポーツとは違うことを，彼に教えるものでもある。生と死を，単なるゲームとして楽しむ権利は，人間のものではない。その夜，彼はもう一度恐怖に向かい合うことによって，ようやく，現実に目を啓かれることになる。そして，新しい夜明けを迎えるための，心の準備が整えられるのである。

その夜のフランシスは，ライオンのことを考えるのを止めてうつらうつらすると，今度は "the bloody headed lion standing over him" (p. 140) という夢を見て跳び起きる，といった状態である。彼の思考はライオンの内面にまで及ぶ。

> Macomber did not know how the lion had felt before he started his rush, nor during it when the unbelievable smash of the .505 with a muzzle velocity of two tons had hit him in the mouth, nor what kept him coming after that, when the second ripping crash had smashed his hind quarters and he had come crawling on toward the crashing, blasting thing that had destroyed him. (pp. 138-139)

フランシスがライオンの死を思い返すことによって "the feeling of life and death"[9] を味わい，死の圧倒的な現実性に打たれていることは明らかである。決して簡単には撃ち殺されようとしない，あのライオンが見せた生を持つものの本能的な生への執念とその死が，

フランシスにとっては模範となり，彼に新しい生き方を提示するのだ。

翌朝の水牛狩りで，彼の新しい生は実現される。フランシスの不安は一掃され，彼にとって恐いものは何もなくなるのである。フランシスは次のように語る。

> "Something happened in me after we first saw the buff and started after him. Like a dam bursting. It was pure excitement." (p. 149)

彼はまるで，欲しくてたまらなかったプレゼントを手にした子供のように有頂天になる。彼が水牛狩りに際して感じるのは，"a drunken elation" (p. 146) であり，"a feeling of definite elation" (p. 148) であり，"a wild unreasonable happiness" (p. 149) だけなのである。

フランシスの目に映る水牛は，"black tank cars" にも見える，"up-swept wide black horns" と "outstretched, wide-nostrilled muzzle" が特徴的な，"the plunging hugeness" (p. 145) そのものである。ライオンよりもはるかに，水牛は凶悪なイメージを持っている。車から飛び降りると直ちにフランシスは射撃を開始する。恐怖心はなく，あるのは自分の妻を寝取ったウィルソンへの憎しみだけだ (p. 145)。手負いのライオンが憎悪に目を細め，全神経を最後の突撃に集中させていたのに似ている，とも言えよう。瀕死の状態でライオンがはい寄っていったのも，フランシスが死の直前に向かい合うものも，共に "muzzle" に対してである。少なくとも彼は，水牛に向かう時，もはや何も思い煩おうとはしない。マーゴットのことも考えない。彼はすべてを振り払って，狙った水牛を仕留めることに集中するのである。そして，生まれて初めて，彼は一切の過去から解放される幸福感を味わうのだ。

水牛狩りに臨むまで，フランシスはほとんどマーゴットに語りかけようとしない。おそらく初めて，彼は妻の浮気を決定的な現実として受け止め，離婚を覚悟しているのだ。彼ははっきりと怒りを示し，もはやマーゴットに頼ろうとはせず，開き直る。一人で水牛に向かっていって，そして，思いがけず自分が独り立ちできることを悟るのだと言えよう。ライオン狩りでフランシスが抱く死への恐怖が，マーゴットに見捨てられる不安と重ねあわされていることは言うまでもない。水牛狩りに際して，妻の浮気に対する彼の怒りは，彼にマーゴットを無視させる。その時，彼は孤りになる不安と共に死への恐怖をも払拭しているのである。彼は勇ましく水牛に立ち向かう。彼はもう一度ライオン狩りに挑戦したいと漏らし，次のように言う。"'After all, what can they do to you?'" (p. 150) この開き直りが，彼の独立を実現し，彼に新しい生き方を啓くのである。開き直った彼が水牛狩りに集中する時，彼は恐怖があればこそそれを克服する勇気も同時に存在しうることを悟るのだ。彼は，狩猟に際して人間が取るべき態度を実現するのである。

射止めた水牛に止どめを刺すとき，フランシスは慎重に狙いを定め，急所を一撃する。その時，いかなる雑念も彼の脳裏を過ぎることがない。彼は，死に瀕する水牛の事実を認

めているだけだ。厳粛な死に立ち会う時，人間のことばや雑念はむしろ不潔なものでしかありえない。フランシスは何も考えず，見事に止どめを刺す。このことは，フランシスが単なるスポーツを越えたものとしての狩猟に取り組むことを始めた証拠である。言い換えれば，オートバイやテニスや，釣りや読書，あるいはセックス，そういった趣味に明け暮れる金持ちの生き方から脱皮して，彼が実人生に取り組むことを始めた証拠なのだ。このフランシスを，ウィルソンは称える。

フランシスが発見した“new wealth”（p. 151）を，ウィルソンは，“Main thing a man had. Made him into a man. Women knew it too. No bloody fear.”（p. 150）だと解説する。ウィルソンは戦争中に見たことを思い出しながら，フランシスが一人前の男に欠かせぬ資質を見いだしたことを認めるのである。

> The great American boy-men. Damned strange people. But he liked this Macomber now. Damned strange fellow.（p. 150）

このウィルソンの思いに表されているのは，彼の不肖の息子，典型的なアメリカ人であるフランシスが，そんなことがありうるとは思ってもみなかったのに突然開眼した，そのことに対する彼の父親的な驚きであり，喜びだと言えよう。常に若さを保とうとする，悪く言えば子供じみたアメリカ人が，イギリス人の理解を越えた潜在力を発揮したのだ。感動したウィルソンは，自分の信条をフランシスに打ち明けて照れるのである。

しかし，フランシスはしゃべりすぎる。彼は妻に，ウィルソンに，自分に生じた変化を，その幸福感を，繰り返し訴えることを始めるのである。まるで，大人に欠かせぬ資性が自分に備わったことが，彼には信じられないことであるかのように。彼は，嬉しくて嬉しくてしょうがない，といった状態になるのだ。彼は心の底から笑みをほとばしらせる。つまり，彼はまだ心の内に生じた自信に酔い，興奮し，歓喜している段階にある，ということが言えるだろう。フランシスは確かに貴重な財産を発見したが，彼はこの新しい財産によって具体的にどんな人生が開かれるか，いまだ将来を展望するには至っていないのである。

ウィルソンは，“new wealth”を手に入れて浮かれるフランシスを諫めることも忘れない。ウィルソンの次のことばは，新しい人生を生きるフランシスに具現されるであろう，生まれ変わったフランシスに見込まれる人間像を暗示している。

> “You're not supposed to mention it.... Much more fashionable to say you're scared. Mind you, you'll be scared too, plenty of times.... Doesn't do to talk too much about all this. Talk the whole thing away. No pleasure in anything if you mouth it up too much.”（p. 151）

今のフランシスの興奮は，やがては醒めるべきものである。彼が獲得した男に欠かせぬ勇気とは，もしそれが本物なら，彼をいわば“aficionado”[10]へと成長させるものであろう。“aficion”を興奮と混同してはいけない，“aficion”を興奮と混同するのは，アメリカ人

がよくやる間違いである，とは，ジェイクの意見である。もっと冷静にならなくてはいけない。今のフランシスの幸福感は，まだ，極めて不安定なものなのである。

もっとも，ヘミングウェイが描く“aficionado”は，ジェイクから *The Old Man and the Sea* のサンチャゴ（Santiago）に至るまで，とても幸福に縁があるとは思えない。フランシス・マコーマーが短いながらも幸福な人生に恵まれるのは，皮肉なことに，この新しい財産の獲得の喜びのさなかに，妻の銃弾に撃たれて死んでしまうからだと言えそうだ。彼がアフリカというイニシエイションの舞台から巣立つことはない。彼は通過儀礼を済ませ，大人としての条件を満たしはするが，大人になったその瞬間に，死ぬのである。

彼が開き直って手に入れた新しい人生，いわば死中に見いだされた生は，間もなく，幕を閉じることになる。この作品の悲劇性は，フランシス・マコーマーの人生が，彼がまだ新しい生き方に目覚めたその喜びに酔いしれている，その間に終わるところにある。

フランシスの死を見る前に，ここでもう一度マーゴットに視点を戻そう。水牛狩りに向かう朝の彼女とフランシスとのやり取りからは，もともと二人の間にあった亀裂が，この時すでに決定的なものとなっていることが窺える。ウィルソンを口汚く罵ることはしても，フランシスが自分からマーゴットに話しかけることはない。マーゴットは夫を宥めようとして言う，“‘No, I won't leave you and you'll behave yourself.’”（p. 142）しかし，フランシスの怒りはもはや鎮まることがない。致命傷を負わされたライオンのように，彼は最後の反撃を開始したのだ。言い訳をするのはマーゴットの方である。二人の立場は，すでに逆転している。

水牛狩りに向かう車の中では，二人は互いに口をきかない。ウィルソンが後ろの座席を振り向くと，フランシスは怒ってむっつりしている。マーゴットはウィルソンにほほ笑みかける。ウィルソンがマーゴットから極めて女性的なものを贈られたことは，彼の次の思いから明らかである。“She looked younger today, more innocent and fresher and not so professionally beautiful. What's in her heart God knows.... She hadn't talked much last night. At that it was a pleasure to see her.”（p. 144）マーゴットが，本来“wicked-mother”であったり，性悪女であったりしようとしていたわけではないことは，すでに述べた。今，フランシスは妻の浮気に対する怒りによって男性性を，マーゴットはウィルソンとの浮気によって女性性を，手に入れているのである。

マーゴットが情況の変化に気づくのは，フランシスが水牛狩りに専心する時である。マーゴットは見事に水牛を射止める夫を称える。“‘You were marvellous, darling.’”（p. 147）彼女にとって男の勇気は称賛する値打ちのあるものだ。勇気のない男を，彼女は男だとは認めないほどである。しかし，夫を称える彼女の顔は，フランシスの顔が輝きを取り戻しているのとは対照的に，青ざめている。マーゴットは“strangely”（p. 149）に夫を見る。こんなりっぱな夫を，自分を無視する男らしい夫を，彼女は初めて見るのである。

マーゴットは，夫に生じている変化に気づいて言う。

"You've gotten awfully brave, awfully suddenly," his wife said contemptuously, but her contempt was not secure. She was very afraid of something. (p. 151)

彼女は，自信に満ちた，フランシスの男らしさが本物であるかどうかを確かめているのだ。そして，マーゴットは，前日に彼女を魅了したウィルソンの男らしい勇気に匹敵するものを，今日のフランシスが手に入れていることを認めざるをえない。ウィルソンが考えるように，マーゴットはフランシスが手に入れたものが何かを知り，そして，彼女の心に不安が生じる。

このフランシスの転身は，もう一日早ければ，何の問題もなく，彼女にとってもこの上ない喜びだったろう。わざわざアフリカまでやって来たのは，マーゴットにとっても，彼女が夫を愛せる女になることが必要だったからだ。彼女ももう決して若くはないし，美しさも衰えている。マーゴットも，アフリカへ行くことにフランシスとの再出発を期していたのだ。しかし，ライオン狩りでの出来事がすべてを台無しにした。マーゴットは昨夜フランシスを見限ったのである。決して彼女一人の責任ではない。昨日のフランシスは，確かに見限られて当然の男でしかなかった。

だから，ウィルソンに代償を求め，ウィルソンによって彼女がすでに女性性を回復した今日となっては，フランシスの転身は，マーゴットにとっては遅すぎるものでしかない。

"Isn't it sort of late?" Margot said bitterly. Because she had done the best she could for many years back and the way they were together now was no one person's fault. (p. 151)

彼女は決して，早まって不当な手段に訴えたことを，ウィルソンとの浮気を，後悔するような女ではない。マーゴットのこの苦々しいことば遣いは，むしろ運命の皮肉に対する，彼女の恐怖心を露呈するものだと言えよう。

事態は逆転した，というより，思いがけず本来あるべき姿に復元されたのである。彼女がフランシスに期待していた男らしい夫，いや，彼女が期待した以上の，敬い愛せる，夫の名に恥じない夫が，今日，実現されている。しかし，それはマーゴットが，彼女の意を汲まぬ，彼女の願いを適えて頼もしい男になろうとしないフランシスを，見限った後のことである。愛すべきフランシスの，愛すべき妻となる夢を彼女が放棄した後のことなのである。僅か一日の違いで，フランシスの転身は，マーゴットにとってその喜びを共にすることができないものとなっている。この一日を境にして，フランシスの変化がマーゴットにもたらす意味は，逆転しているのである。勇者フランシスの愛すべき妻となる値打ちは，今の彼女にはない。

3. The Irony of Fate

フランシスが最初に撃った水牛が茂みに姿を隠し，ライオン狩りの時と同じ情況が整えられて，物語りは劇的な結末へと向かう。フランシスにとってはいよいよ通過儀礼のクライマックスが訪れるのだ。

下手にフランシスの恐怖心を煽らないようにと，最後まで伏せておいた水牛の狙いどころをウィルソンが説明する。"'When a buff comes he comes with his head high and thrust straight out. The boss of the horns covers any sort of a brain shot. The only shot is straight into the nose.... After they've been hit once they take a hell of a lot of killing....'" (p. 152) その巨体にもかかわらず的は小さい。しかも，手負いの水牛の凶暴さには比類がない。しかし，フランシスにライオン狩りの時の恐怖感はもはや戻って来はしない。彼は心臓の鼓動と喉の渇きを感じるけれど，それは興奮のためであって恐怖からではない。水牛が待ち受ける茂みへと向かう時，彼は妻を振り返って手を振る余裕さえ見せる。

水牛は，すでに死んでいると伝えられ，フランシスがウィルソンと握手を交わしているその時，不意をついて襲ってくる。"...they saw...the bull coming, nose out, mouth tight closed, blood dripping, massive head straight out, coming in a charge, his little pig eyes bloodshot as he looked at them." (p. 153) この凶暴なもの，怒りに目を血走らせて突進して来る手負いの水牛に，フランシスは正面から，正々堂々と，男らしく，勇敢に，ウィルソンが脇に退いて片膝をつき，肩を狙って撃つのとは対照的に，しっかりと立って，小さな標的である鼻を狙って (p. 153)，立ち向かうのである。

やがてウィルソンの姿は彼の視界から消える。手負いの水牛が猛烈な勢いでフランシスめがけ，近づいて来るのだ。

> ...he did not see Wilson now and, aiming carefully, shot again with the buffalo's huge bulk almost on him and his rifle almost level with the on-coming head, nose out, and he could see the little wicked eyes and the head started to lower.... (p. 153)

彼の狙いは僅かに高すぎて，弾丸は水牛の角に当たって弾ける。彼はもう一度慎重に狙いを定め，撃つ。水牛の頭が下がり始め，ついに水牛は仕留められたかと思われる，その時，水牛の巨体はすでにフランシスを突き飛ばさんばかりなのである。

フランシス・マコーマーは，この手負いの水牛との対決において，まさに闘牛士の闘いぶりを見せるのだ。*The Sun Also Rises* において，ヘミングウェイは，牛の角をぎりぎりのところでかわす闘牛士ロメロ (Pedro Romero) を，次のように描いている。

> ...The bull charged and Romero waited for the charge, the muleta held low, sighting along the blade, his feet firm. Then without taking a step forward,

he became one with the bull....[11]

このロメロと同じように，フランシスは，手負いの水牛と一対一の対決を繰り広げ，水牛を2ヤードと離れてはいないところまで引きつける，そして，この水牛と，まさに一体となるのである。

"The Short Happy Life of Francis Macomber" は，いわば，ロバート・コーンのペドロ・ロメロへの変容を描いた作品だと言えなくもない。物語り前半のフランシスの特徴は，コーンと同じ小児的無能である。夫たる値打ちのない男として妻からも蔑まれるフランシスは，目前で妻に浮気される。それでもなおマーゴットに，自分の妻らしく自分を愛して欲しいと願うことは，いかにも空しい。そして，ついに開き直って彼が妻を諦める時，彼はマーゴットの理想の男性を実現するのである。彼は「しっかりと大地に足を据えて」怯まず，迫り来る水牛に立ち向かえる男となる。ウィルソンやジェイクのような，大地との接触を欠く国籍喪失者になるのではない。実際に闘牛場の中央に立ちはだかって，一歩も引かずに手負いの牛の突進を待ち構えるロメロ的英雄を実現するのである。

この愛すべき男となったフランシスを水牛の角が貫こうとする時に，マーゴットは夫を救うために「水牛を狙って」引き金を引き，フランシスの頭を撃ち抜いてしまう。彼女一人の責任ではなかったにせよ，マーゴットはフランシスを裏切り続けてきた。今，愛する夫が水牛の角にかかって殺されようとする時，彼女は妻としてたった一つ，夫のためにしてやれることを見いだすのである。そして，マーゴットがフランシスのために行う，初めての愛による行為が，皮肉なことに，フランシスを殺してしまう結果となるのである。

マーゴットがブレットと違う点はここにある。ブレットはロメロの愛を獲得しながらも，自分がロメロを駄目にしてしまう女であることを悟って，ロメロを愛するがゆえに自ら身を引く。一方，マーゴットは，勇気を手に入れたフランシスがもはや自分を必要とはしていないことに感づきながら，彼が水牛に殺されそうになるとは言え，愛するがゆえに要らぬ手出しをする。その結果，フランシスを殺してしまうのだ。

無意識にせよマーゴットには殺意があった可能性があるとする批評は，フランシスの死に続くウィルソンとマーゴットのやり取りを解釈するために，事故だと言いながら殺人をほのめかすウィルソンに対して，マーゴットがそれを否定しようとはしないという点を取りあげる。[12] しかし，故意による殺人なら，また，無意識の殺意によるのならなおさら，マーゴットがむしろ意識的に，それをはっきりと否定する方が自然である。誘導尋問にも似たウィルソンのおしゃべりに対して，マーゴットが夫の傍らにひざまづいて泣きながら "Stop it" としか繰り返さないことは，むしろ，殺意などとは縁のない，フランシスに対する彼女の極めて女性的な，深い思いを暗示するものだ。ウィルソンが，フランシスを好きになりかけていたと漏らすと，マーゴットは "please" を三回も付けて "stop it" と頼んでいる。彼女が触れて欲しくないのは，ウィルソンの簡易ベッドに入ったその翌朝に，夫

への，一度は諦めた愛をつかんだ女の真情であり，運命の皮肉に対する呪いである。

発砲という形をとって証明されるマーゴットの愛を獲得したことが，フランシスの勝利を意味することは言うまでもない。フランシスがウィルソンに対しても勝利を収めていることは，彼の水牛との対決ぶりから明らかだ。さらに，彼が手負いの水牛を目と鼻の先まで引きつけてなお恐れず，それを仕留めることは，彼が手にした勇気が決してその場だけのものではなかったことを証明している。そして，何よりも，彼はその死によって幸福な人生を実現している。彼の血はアフリカの渇いた土を潤し，彼の罪はあがなわれるのだ。ただ，彼は，ヘミングウェイが描く英雄の例に漏れず，己れの勝利を知らないのだけれど。

この物語を劇的に展開させているものが極めて古典的な運命の皮肉であることは見逃せない。ライオン狩りでの体験は彼の無垢の夢を打ち砕く。アフリカは，一転して，ロマンスの世界からアイロニーの世界へと様相を変えるのである。その夜，彼はライオンが呼び覚ました恐怖を回想し，初めて，生きることの意味を自らに問う。そして，事実，アフリカが妻の浮気の現場となっていることを知って，彼は自らを愚者の楽園から追放しなければならないことを覚悟するのだ。彼はアイロニーの世界にこそ実人生を見いだすのである。

翌朝，フランシスが具現する世界は，まさにアイロニーの世界である。彼は，臆病者として水牛狩りに臨む時に勇者となる。マーゴットに見限られることによって初めてマーゴットの理想に適う夫となり，彼は，マーゴットを諦めることによってマーゴットの愛を得るのだ。そして，彼が愛すべき夫となったことがマーゴットに銃を取らせ，マーゴットの夫を救おうとする行為が彼を殺してしまう結果となる。しかし，フランシス・マコーマーの「短い幸福な人生」が実現されるのは，その死によってなのである。

この作品の結末は，一見，極めて悲劇的であるかに見える。なるほど，フランシスとマーゴット，この男女の溝は深く，二人の思いがかみ合うことはついにない。しかし，フランシスは自分の転身ぶりに驚喜して幸福感に酔いしれている，その瞬間に死ぬことができる。しかも，彼はマーゴットの銃弾によって死ぬことができる。マーゴットがフランシスを撃ち殺してしまうことが，水牛との一体化を果たした彼の勇気を証明し，彼が妻の愛を獲得したことを証明することによって，「幸福な人生」と呼べるものを彼が手に入れたことを確実にしていることは言うまでもない。

フランシスは，水牛の角にかかって死ぬのではなく，妻の銃弾によって死ぬのである。彼が生きることを始めたアイロニーの世界では，彼が水牛の角にかかって非業な死を遂げたとしても不思議はない。しかし，彼は，偶然にも，非業な死を遂げようとする直前に妻の銃弾を受けて，非業な死を回避するのである。彼の人生は幸福感と共に幕が落とされる。したがって，彼の死は，劇的ではあるけれど，ヒロイックではなく，幸福な死であり，アイロニックな死だと言えよう。

フランシスを指してウィルソンが "Damned strange fellow." (p. 150) と呼ぶのは，フランシスの単純さに彼が驚かされるからである。その単純さゆえに彼は愚かであり，大失態を演じ，マーゴットを失うのだけれど，その単純さゆえに彼はまた突然勇気に目覚め，手負いの水牛と一対一の対決を繰り広げる英雄となる。そして，マーゴットの愛を獲得して，彼は幸福な死を遂げるのである。ヘミングウェイが描く登場人物たちの中にあっては極めて稀な，「幸福な死」をわがものとするこのフランシス・マコーマーが，"the great American boy-men" の代表として描かれ，奇妙なアメリカ人の正体を暴露することで，その存在理由を主張していることは明らかである。

注

(1) Ernest Hemingway, "The Short Happy Life of Francis Macomber," *The Snows of Kilimanjaro and Other Stories*, (New York : Charles Scribner's Sons, 1970), p. 150 からの引用。テキストからの引用はすべてこの版による。以下，引用の際は引用文末尾に項数のみを記す。

(2) Philip Young, *Ernest Hemingway : A Reconsideration*, (University Park, Pa. : Pennsylvania State University Press, 1966, 6th printing 1981), p. 71.

(3) 今村楯夫，『ヘミングウェイ：喪失から辺境を求めて』(東京：冬樹社，1979)，p. 138.

(4) Philip Young, 上掲書，p. 70. "ithyphallic authority" ということばは，D. H. Lawrence のホーソーン論から引用されている。cf. D. H. Lawrence, "Nathaniel Hawthorne and *The Scarlet Letter*," *Selected Literary Criticism*, ed. Anthony Beal, (London : Heinemann, 1956, reprinted in 1973), p. 362.

(5) Earl Rovit and Gerry Brenner, *Ernest Hemingway*, (Mass. : Twayne Publishers, 1986), p. 56.

(6) 今村楯夫，上掲書，p. 139.

(7) 高村勝治，"『日はまた昇る』——パリのアメリカ人——，"『ヘミングウェイの世界』石一郎編，(東京：荒地出版社，1970，6th printing 1982)，p. 127.

(8) Ernest Hemingway, *Death in the Afternoon*, (New York : Charles Scribner's Sons, 1960), p. 2.

(9) Ernest Hemingway, *Death in the Afternoon*, p. 3.

(10) Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises*, (New York : Charles Scribner's Sons, 1970), p. 132.

(11) Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises*, p. 220.

(12) Philip Young, 上掲書，p. 73，今村楯夫，上掲書，p. 143.